

一 総説・概説

- 万葉集に於ける口誦文芸の要素 武田祐吉  
国語と国文学(三・二、20・1、2) 10
- 万葉集卷十八の本文に就いて 大野 晋  
国語と国文学(三・三、20・3) 9
- 文学意識発生の歴史的地盤―万葉集について  
の覚え書其一― 西郷信綱 国語と国文学  
(三・三、20・3、4) 11
- 特殊語彙に反映せる国民の忠誠心―「みやこ」  
の語義について― 池田亀鑑 国語と国文  
学(三・六、20・6、7) 8
- 万葉集卷十三作歌時代考 吉原敏雄 国語と  
国文学(三・八、20・8) 7
- 解釈の側面から見た万葉集の言語構造  
鴻巣隼雄 国語と国文学(三・一、21・1) 7
- 万葉集の時代的背景 川崎庸之 解釈と鑑賞  
(二・五、21・5) 7
- 万葉集短歌字余考 佐竹昭広 文学(二四・五、  
21・5) 13
- 古代文学小史 久松潜一 解釈と鑑賞(二・七、  
21・7) 7
- 万葉か新古今か 岡崎義恵 短歌研究(三・六、  
21・9) 5
- 古代日本文学の展開 斎藤清衛 文学(四・六、  
21・9) 12
- 上代文献解釈への小さき径 小島憲之 国語  
・国文(五・二〇、21・11) 18
- 万葉的レアリズムと現代短歌の展開  
北住敏夫 短歌研究(四・一、22・1、2) 9
- 万葉短歌の一分類形式とその一種 林 大  
国語と国文学(四・五、22・5) 10
- 万葉人の世界(一) 西郷信綱 文学(五・五、  
22・5) 17
- 万葉人の世界(二) 西郷信綱 文学(五・六、  
22・6) 13
- 万葉集の歌境の展開 鴻巣隼雄 文学(五・七、  
22・7) 10
- 万葉集研究の一問題―古典に於ける研究と批  
評― 大久保 正 国語と国文学(四・二〇、  
22・10) 9
- 上代文学考察の一態度 次田真幸 国語と国  
文学(四・二、22・11) 10
- 短歌夢物語 兼常清佐 文学(五・二、22・11) 9
- 万葉の発見 高木市之助 短歌研究(五・一、  
23・1) 5
- 万葉集の相聞 五味智英 日本短歌(七・二、  
23・1) 3
- 文学の伝統と民主主義 本田喜代治 文学  
(二・六、23・1) 9
- 藤原宮の役民の作れる歌について 北山茂夫  
文学(二・六、23・6) 14
- 万葉集原形の不統一性 武田祐吉 国学院雜  
誌(五・二、23・7) 1
- 万葉における慶雲期の諸様相 北山 茂  
思想(岩波書店)(元・二、23・9) 14
- 古代文芸における死の悲劇―倭建命と大津皇  
子をめぐる― 北住敏夫 解釈と鑑賞  
(三・一〇、23・10) 6
- 片歌論 田辺幸雄 国語と国文学(三・二、  
23・11) 12
- 古代文学の業績をめぐる 吉野 裕  
文学(六・三、23・12) 4
- 譬喩から象徴へ 武田祐吉 短歌研究(六・三、  
24・3) 5
- 上古文学史序説 大久保 正 国語と国文学  
(二・六、24・4) 8
- 上古の文学史 高木市之助 国語と国文学  
(二・四、24・4) 7
- 万葉集における「清なるもの」 和田繁二郎  
説林(二・四、24・4) 9
- 万葉問聞抄の成立―問件より問聞抄へ―  
岡田稔 日本文学研究(一、24・6) 8
- 万葉集研究の一課題―中国文学との交渉につ  
いて― 土岐善麿 短歌俳句研究(四、24・  
6) 12
- 万葉集に於ける情調美の胚胎―「鬚髯」と「可  
蘇氣伎」について― 本林勝夫 文芸研究(一、

24・7) 9

貧窮問答歌の成立—奈良朝初期の農民闘争との連関— 北山茂夫 文学(七・八、24・8)

23

万葉集に於ける「うつろひ」 青木生子 文芸研究(三、24・10) 11

態・跡状 佐伯梅友 文学(七・二、24・11)

6

万葉集短歌における原始的要素—寄物陳思の基礎構造— 鴻巣隼雄 国語と国文学(三、一、25・1) 9

歌論の発生 扇畑忠雄 文芸研究(三、25・1)

9

万葉集における作品の単位 安倍辰夫 文芸研究(三、25・1) 9

万葉集・古今和歌集・新古今和歌集

藤森朋夫 解釈と鑑賞(五・二、25・2) 4

日本の抒情詩の展開 土居光知 文学(六・二、25・2) 13

筑前国志賀白水郎十首の真意 笠井 清

国語と国文学(七・三、25・2) 6

万葉集卷十三の歌私見—問答歌成立の一過程

松田好夫 日本文学研究(六、25・2) 10

日本に於ける民謡の問題—覚え書き風に—

高木市之助 文学(六・二、25・2) 7

相聞考(補改) 山田孝雄 日本文学研究

(10、25・3) 6

古代前期文学 松崎一夫 文学(八・三、25・3) 4

歌言葉と和歌の性格 吉沢義則 短歌研究(七・三、25・3) 6

古典的文学作品に対する言語感覚の問題

亀井 孝 国語と国文学(七・四、25・4) 9

「万葉集」研究法 森本治吉 日本文学教室

(一、25・7) 6

貧窮問答新考 笠井 清 日本短歌(九・七、25・8) 5

新校万葉集改訂表 沢瀉久孝 国語・国文学(九・一、25・9) 8

古代歌謡 杉浦明平 文学(八・九、25・9) 8

万葉集と古今集との間 窪田章一郎 文学(八・九、25・9) 7

万葉集の形成—序論— 西郷信綱 文学(八・九、25・9) 14

万葉集の恋愛歌 赤木健介 文学(八・九、25・9) 10

方言文学としての東歌—その言語学的背景

亀井 孝 文学(六・九、25・9) 14

あづま歌の風土性 森本治吉 短歌研究(七・二、25・10) 5

詩歌史の時代区分 志田延義 解釈と鑑賞

(五・二、25・11) 3

敬語に表はれた上代文献の政治的性格(下)

—大化改新の理念についての一考察—

青木紀元 芸林(二・五、25・12) 10

万葉集と古今和歌六帖 田林義信 学芸研究—人文科学—(和歌山大学学芸学部)(二、12) 28

古代文学の現代的意義 柴生田 稔 解釈と鑑賞(六・一、26・1) 4

万葉集の現代的生命 五味智英 解釈と鑑賞(六・一、26・1) 6

旋頭歌放 清水克彦 国語・国文(二〇・一、26・1) 14

万葉集と玉台新詠 尾山篤二郎 国語と国文学(六・一、26・1) 5

蒙求と奈良朝文学 水野平次 国語・国文(二〇・一、26・1) 19

新撰和歌集と万葉集 久曾神 昇 日本文学研究(九、26・1) 6

現代文学の課題—叙事詩への道— 岡本 潤 文学(九・一、26・1) 9

憶良の松浦歌と国守巡行制度 仁井田 陞

アララギ(四・三、26・3) 2

万葉集における流動美 北住敏夫 短歌研究(八・二、26・3) 7

古写本の意義—元暦校本万葉集卷十八について— 武田祐吉 国語と国文学(六・四、26・4) 7

万葉集に於ける連作的傾向(一) 茂山正規 創作(三・五、26・5) 3

万葉集の物語性 岡田 稔 日本文学研究 (二二) 26・5) 7

万葉集に於ける連作的傾向 (二二) 茂山正規 創作 (元・六) 26・6) 3

万葉集に於ける連作的傾向 (三三) 茂山正規 創作 (元・七) 26・7) 4

古代文学史の開花期天武朝—アポロ的とディ

オニソスとの対立—止揚期として— 徳光久也 文学 (元・七) 26・7) 10

家族・家族制度 長野 正 解釈と鑑賞 (一六八) 26・8) 3

氏族・氏族制度 長野 正 解釈と鑑賞 (一六八) 26・8) 2

万葉集の美感と「まこと」の意味 井上 豊 国語と国文学 (二六八) 26・8) 6

万葉集に於ける連作的傾向 (四) 茂山正規 創作 (元・八) 26・8) 2

白鳳文化論 川崎庸之 文学 (一九九) 26・9) 7

万葉集の雨の歌についての覚書 森 淳司 古典論叢 (二二) 26・9) 10

上代和歌の集成としての万葉集 五味智英 解釈と鑑賞 (二六〇) 26・10) 5

「万葉集」書名の意義 鈴木虎雄 万葉 (一) 26・10) 3

万葉集雑歌の典拠をめぐって 伊東 博 万葉 (一) 26・10) 8

万葉集に於ける連作的傾向 (五) 茂山正規 創作 (元・〇) 26・10) 4

万葉集の外国語記について 佐々木信綱 学苑 (三三〇) 26・11) 3

短歌に於ける文学遺産の問題—主として万葉集に關して— 土屋文明 文学 (一九二) 26・11) 8

万葉集に於ける連作的傾向 (六) 茂山正規 創作 (元・三) 26・12) 3

万葉集「葛飾早稻」に就いて 市山盛雄 短歌研究 (八〇) 26・12) 6

天平歌壇の流れ 小島憲之 国語・国文 (三二一) 27・1) 17

「万葉集は支那人が書いたか」続貂 神田喜一郎 国語・国文 (三二二) 27・1) 5

詩的言語研究—朝布麻須等六其草深野— 千田幸夫 国語と国文学 (元・一) 27・1) 13

「筑前国志賀白水郎歌」論 (上)—特にその心情表現の構成について— 犬養 孝 国語と国文学 (元二) 27・1) 12

万葉集名義論考 星川清孝 国語と国文学 (元二) 27・1) 12

遠くに突き放して見た「上代」 神田秀夫 国語・国文 (三三二) 27・1) 16

叙事詩の伝統 高木市之助 文学 (三〇二) 27・1) 9

万葉集歌表現の一面 小島憲之 万葉 (三) 27・1) 10

「筑前国志賀白水郎歌論」(下)—特にその心情表現の構成について— 犬養 孝 国語と国文学 (元三) 27・2) 10

万葉集の旅の歌 佐々木信綱 解釈と鑑賞 (二七三) 27・3) 7

歌論発展における「新古」意識について—万葉集注記部分よりの研究— 塚田六郎 日本文学論 (九) 27・3) 16

万葉集の無名歌 扇畑忠雄 文芸研究 (九) 27・3) 7

万葉集と「フモール」—「譚戲」の歌と讃酒歌について— 高橋専吉 文芸研究 (九) 27・3) 10

万葉集受用のあと覚書 柴生田 稔 国語と国文学 (元四) 27・4) 14

万葉集と神道思想 安津素彦 国学院雑誌 (三二一) 27・4) 11

万葉集に表われた祭祀—斎瓶・峠を中心として— 西角井正慶・大場磐雄 国学院雑誌 (三二二) 27・4) 18

真間・芦屋の昔がたり 折口信夫 国学院雑誌 (三二二) 27・4) 15

「みやび」の近代的展開 今井福治郎 国学院雑誌 (三二二) 27・4) 10

瓊音も母由良に(水の鎮魂)—万葉集「高志歌」能登国歌を起点として— 高崎正秀

- 国学院雑誌(三三・、27・4) 16  
 「或本反歌二首」(四二四・四二五) 小考  
 内田暁郎 万葉(三、27・4) 7  
 万葉集と古今六帖 山田孝雄 万葉(三、27・4) 19  
 遊仙窟と万葉集―三八三四の歌について―  
 土橋 寛 万葉(三、27・4) 6  
 万葉集と雨月物語 後藤丹治 立命館文学  
 (八三、27・4) 13  
 「櫻子」と「郎女」 神田秀夫 国語と国文学  
 (二九・六、27・6)  
 万葉集次点歌とその初期加点点者 上田英夫  
 国語と国文学(元六、27・6) 7  
 万葉集の古点 武田祐吉 国学院雑誌(三三・  
 二、27・6) 4  
 反歌の問題 西角井正慶・藤野岩友 国学院  
 雑誌(三三・、27・6) 17  
 万葉集における歌合せの問題 柳井己酉朔  
 国学院雑誌(三三・、27・6) 10  
 東歌における情意表現 賀古 明 国学院雜  
 誌(三三・、27・6) 11  
 万葉考古学序説 樋口清之 国学院雑誌(三三・  
 二、27・6) 12  
 「万葉集次点歌とその初期加点点者」補正  
 上田英夫 国語と国文学(元七、27・7) 1  
 万葉集はなぜ訓めるか 池上楨造 万葉(四、  
 27・7) 7  
 万葉集本文批評の一方 佐竹昭広 万葉  
 (四、27・7) 18  
 文献解釈の限界性―「万葉集」の名義をめぐ  
 つて― 小島憲之 国語・国文(二七、27・  
 8) 10  
 万葉集反歌の提供する一つの問題 内田暁郎  
 国文学攷(三、27・8) 8  
 万葉集と奈良―檜葉和歌集について―  
 石井庄司 国語・国文(三九、27・9) 6  
 天のかぐ山 武田祐吉 上代文学(一、27・  
 9) 4  
 「ツマゴミ」について 石井庄司 上代文学  
 (一、27・9) 4  
 初期万葉の論 田辺幸雄 上代文学(一、27・  
 9) 7  
 古代和歌の造形方法(其の一) 森本治吉  
 上代文学(一、27・9) 10  
 新万葉論への序説 井上 豊 上代文学(一、  
 27・9) 5  
 万葉短歌の表現 越沢 洋 上代文学(一、  
 27・9) 8  
 相關の意義―万葉集三大部立の地位と性格―  
 伊藤 博 万葉(五、27・10) 20  
 仮名字母より見たる万葉集卷十四の成立過程  
 について 福田良輔 万葉(五、27・10) 10  
 万葉集の芸術史的位位置―古代文芸の様式につ  
 いて― 中村茂夫 万葉(五、27・10) 10  
 民族文芸学の立場とその限界―犬養氏の「筑  
 前国志賀白水郎歌」論を駁す―釜田喜三郎  
 国語と国文学(二九・三、27・12) 10  
 万葉集におけるリアリズム―囑物発思につい  
 て― 田辺 爵 日本文学研究(四、27・  
 12) 5  
 仮名の発達と文学史との交渉 大野 晋  
 文学(三三・三、27・12) 10  
 万葉集の「和歌」 石井庄司 短歌研究(一〇・  
 一、28・1) 7  
 記紀歌謡と初期万葉 久松潜一 万葉(六、  
 28・1) 9  
 万葉集の芸術史的位位置(下)―古代文芸の様式  
 について― 中村茂夫 万葉(六、28・1) 7  
 巫女の嘆き―上代説話と歌謡とのある場合―  
 吉永 登 万葉(六、28・1) 7  
 万葉集の表現の問題 扇畑忠雄 文芸研究  
 (二二、28・2) 8  
 万葉教義問答 日夏歌之助 万葉集大成月報  
 (一、88・3) 4  
 韻文の解釈 吉原敏雄 解釈と鑑賞(一八四、  
 28・4) 5  
 万葉集における心情表現の特性―「心に乗る」  
 「乘りにし心」といういい方について―  
 北住敏夫 万葉(七、28・4) 9  
 純粋抒情詩 森本治吉 解釈と鑑賞(一八五、  
 28・5) 3

- 日本文学史における「古代」の概念 久松潜一  
 解釈と鑑賞(一六五、28・5) 2
- 古代前期の文学と環境 太田善麿 解釈と鑑賞(一六五、28・5) 4
- 古事記神話の構想について 浜田清次 文艺研究(三三、28・6) 5
- 譬喩歌の性格 扇畑忠雄 万葉(八、28・7) 8
- 袖中抄と類聚古集 吉永 登 万葉(八、28・7) 3
- 万葉貴族の生活圏―万葉集の歴史的背景― 園田香融 万葉(八、28・7) 14
- 万葉人の庖厨に漢籍あり 小島憲之 国語・国文(三七、28・7) 16
- 万葉集の文学的研究法 高木市之助 上代文学(二、28・7) 10
- 万葉集の叙事詩的要素 久松潜一 上代文学(二、28・7) 13
- 万葉・古今・新古今 窪田章一郎 解釈と鑑賞(一八、28・8) 2
- 貴族的発想形式に対する防人歌における庶民的反応 松田芳昭 国語と国文学(三六、28・8) 10
- 菟孤射考 森 安太郎 万葉(九、28・10) 2
- 万葉集歌修辭の一面 伊藤 博 万葉(九、28・10) 9
- 「トガ野」の鹿と「ヲグラ山」の鹿―万葉伝
- 詠歌をめぐる― 小島憲之 万葉(九、28・10) 12
- 壬申の乱の筆録者 田辺 爵 文学(三二、28・11) 6
- 万葉の内部と外部 久松潜一 上代文学(三、28・11) 1
- 古代和歌の造形方法について 森本治吉 上代文学(三、28・11) 7
- 万葉作家の眼 森脇一夫 上代文学(三、28・11) 8
- 最近の万葉集翻訳 幣原道太郎 上代文学(三、28・11) 9
- 「ますらお」の意味―万葉集の精神についての一考察― 三枝康高 国語と国文学(三〇、28・12) 12
- フランス詩人と万葉歌人 加藤美雄 万葉集大成月報(八、28・12) 4
- 相聞歌源流 武田祐吉 短歌(一五、29・1) 11
- 元暦校本万葉集卷十七の性格 吉井 巖 万葉(二〇、29・1) 6
- 万葉集における部類の基準としての時間 武田祐吉 万葉(二〇、29・1) 11
- 無常観―旅人の歌をめぐる― 井手恒雄 万葉(二〇、29・1) 6
- 新羅へ 高木市之助 国語と国文学(三三、29・3) 7
- 万葉長歌の短歌化 田林義信 和歌山大学学芸学部紀要IV人文科学(29・3) 16
- 近代歌論の発生と展開 小泉芝三 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 6
- 和歌とは何か 久松潜一 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 3
- 日本文学史に占める和歌の位置 西下経一 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 7
- 和歌年表 木俣 修 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 16
- 万葉調歌人の系譜とその変貌 森本治吉 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 4
- 挽歌について―人麿挽歌の成立について― 尾山篤二郎 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 5
- 失われた柘枝伝「伝説の表現」をめぐる― 小島憲之 人文研究(五四、29・4) 13
- 相聞歌について 吉原敏雄 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 3
- 生活歌について 五味保義 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 4
- 自然歌について 北住敏夫 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 3
- 羈旅歌について 今井福治郎 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 3
- 賀歌について―賀歌とその周辺― 高崎正秀 解釈と鑑賞(一九四、29・4) 7
- 東歌 西角井正慶 解釈と鑑賞(一九四、29・

4) 1

防人歌 鴻巣隼雄 解釈と鑑賞(九・四、29・4)

3

古代における言語意識の展開―「こと」から「ことば」へ― 藤井信男 大倉山論集(三、29・5) 6

29・5) 6

万葉の歌体 鼓常良 万葉集大成月報(二〇、29・5) 3

29・5) 3

「をのこやも」の嘆き 田中卓 万葉集大成月報(二〇、29・5) 2

月報(二〇、29・5) 2

方言の変遷とその背景 江湖山恒明 解釈と鑑賞(九・六、29・6) 5

鑑賞(九・六、29・6) 5

月の変若水―万葉飛鳥の夢― 西角井正慶

上代文学(四、29・7) 2

一人一首抄 佐々木信綱 上代文学(四、29・7) 3

7) 3

万葉集―作品はどうして成立したか―

志田延義 解釈と鑑賞(九・七、29・7) 3

万葉集と大陸との交渉を追う友に 神田秀夫

解釈と鑑賞(九・七、29・7) 16

万葉集と古代文化(座談会) 久松潜一他

上代文学(四、29・7) 4

万葉集私注卷十四 柴生田 稔 アララギ

(四七・八、29・8) 4

奈良朝の太宰府の歴史一般(一) 尾山篤二郎

万葉集大成月報(三、29・8) 5

枕詞の源流(一) 土橋 寛 立命館文学

(二二、29・8) 13

日本語の黎明―成立から貴族時代(前期)まで― 大野 晋 解釈と鑑賞(九・二、29・10) 40

29・10) 40

万葉の伝統とその展開 瀧瀬爵克 文学研究

(二六、29・10) 11

皇極紀童謡実体 土橋 寛 万葉(三、29・10) 11

10) 11

奈良朝の太宰府の歴史一般(二) 尾山篤二郎

(三、29・10) 6

枕詞の源流(二) 土橋 寛 立命館文学

(三、29・10) 14

祭幣帛希 武田祐吉 国学院雑誌(五三・三、29・11) 3

11) 3

恋歌の基点―相聞と挽歌と羈旅歌と―

中塩清臣 国学院雑誌(五三・三、29・11) 10

万葉集東歌の類歌をめぐって 上西 繁

国文論叢(神戸大学)(三、29・11) 11

「言挙」考 太田善麿 国語と国文学(三三・三、29・12) 8

29・12) 8

「言霊」考―万葉集に見出される言語意識

(一)― 太田善麿 東京学芸大学研究報告

(五、29・12) 10

奈良朝の太宰府の歴史一般(三) 尾山篤二郎

万葉集大成月報(二四、29・12) 6

万葉集作者不明の巻の分類と詠物 小沢正夫

国語と国文学(三三・三、30・1) 8

あまつひつぎ考―大伴家持の用語の一として― 武田祐吉 万葉(四、30・1) 4

七五調の成立について 瀬古 確 万葉(四、30・1) 6

竹取翁歌と孝子伝原穀説話 西野貞治 万葉(二四、30・1) 5

わざうた考 田辺幸雄 万葉(四、30・1) 10

奈良朝の太宰府の歴史一般(四) 尾山篤二郎

万葉集大成月報(五、30・2) 4

野干考 島田成短 国学院雑誌(五三・四、30・4) 2

遣唐使 高木 卓 解釈と鑑賞(二〇・四、30・4) 2

雑歌成立の一形態―新婚のことほぎ歌をめぐって― 伊藤 博 万葉(二五、30・4) 9

日本古典をめぐって―「万葉集」を中心に― 宮崎友夫他六名 近代文学(〇・五、30・5) 28

防人の心―家ろには葦火け焚ども― 岡田清子 国語・国文(四四・五、30・5) 10

万葉語彙の一面 阪倉篤義 国語・国文(四四・五、30・5) 11

万葉集卷の十八の巻首 武田祐吉 上代文学

- (五、30・5) 5  
万葉と詩経・文選 久松潜一 上代文学(五、30・5) 1
- 万葉時代の宗教について 佐々未秋夫 万葉集大成月報(一六、30・6) 3  
枕詞・序詞 大久保 正 解釈と鑑賞(二〇、六、30・6) 3
- 古代日本語における色名の性格 佐竹昭広 国語・国文(二四六、30・6) 16
- 万葉集に現れた歴史的世界 肥後和男 芸林(一六三、30・6) 10
- 万葉集「玉の緒ばかり」考 秋本吉郎 語文(大阪大学)(二五、30・7) 9
- 浦島の歌に見える玉篋のタブー発想について 西野貞治 万葉(一六、30・7) 3
- 梅花歌序考 古沢未知男 国語と国文学(三三、一八、30・8) 10
- 遊宴の歌謡 窪田敏夫 解釈と鑑賞(二〇八、30・8) 6
- 東歌・旋頭歌について 藤森朋夫 解釈と鑑賞(二〇六、30・8) 8
- 記紀から万葉へ―恋歌を中心に― 青木生子 解釈と鑑賞(二〇八、30・8) 7
- 労働歌謡―田歌を中心として― 西角井正慶 解釈と鑑賞(二〇八、30・8) 6
- 万葉の歌と絵画 奥平英雄 万葉集大成月報(二六、30・8) 3
- 日本神話の諸問題 松村武雄 解釈と鑑賞(二〇九、30・9) 4
- 万葉集における抒情の展開 岡崎義恵 解釈と鑑賞(二〇九、30・9) 5
- 上代文学のとりあげ方 久松潜一 解釈と鑑賞(二〇九、30・9) 7
- 古代社会 竹野長次 解釈と鑑賞(二〇九、30・9) 6
- 万葉集における叙景歌の発達 扇畑忠雄 解釈と鑑賞(二〇九、30・9) 5
- 上代文学と大陸文学 小島憲之 解釈と鑑賞(二〇九、30・9) 5
- 古代宮廷歌謡の性格 土橋 寛 解釈と鑑賞(二〇九、30・9) 4
- 枕詞の概念と種類 土橋 寛 立命館文学(二二四、30・9) 39
- 万葉人の確実を利用したと思はれる漢籍 小島憲之 万葉集大成月報(二〇、30・9) 4
- 万葉集卷十一、十二について 津留繁雄 不知火(九、30・10) 2
- 万葉・古今・新古今の歌に現われた色名の集計調査報告 共同研究 鶴見女子短期大学 紀要(一、30・11) 9
- 奈良時代東国方言とその基層語 福田良輔 国語・国文(二四二、30・11)
- 上代の物価 尾山篤二郎 万葉集大成月報(二二、30・11) 3
- 万葉の夢 伊藤嘉夫 跡見学園国語科紀要(四、30・12) 10
- 万葉集における賀歌について 竹内金次郎 日本大学文学部研究年表(一六、30・12) 22
- 「すべなし」考 賀古 明 万葉集研究(二、30・12) 7
- 万葉集の性格 武田祐吉 万葉集研究(万葉西会)(一、30・12) 6
- 東歌のほととぎす―東歌研究の一側面― 大久保 正 日本文学(五二、31・1) 7
- 万葉から古今へ―六歌仙の問題―窪田章一郎 日本文学(五二、31・1) 7
- 万葉研究の思い出 久松潜一 日本文学(五二、31・1) 7
- 万葉私記(二) 西郷信綱 日本文学(五二、31・1) 7
- 万葉集に学ぶもの―実作者としての立場から― 近藤芳美 日本文学(五二、31・1) 4
- 万葉歌枕に関する疑問二、三 大井重二郎 万葉(一八、31・1) 7
- 志賀白水郎歌十首 沢瀉久孝 万葉(一八、31・1) 6
- 相関の系譜 伊藤 博 万葉(一八、31・1) 12
- 朝歌考 中塩清臣 万葉(一八、31・1) 8
- 万葉集における神々の世界 大久保 正 国学院雑誌(五二、31・2) 9

- 万葉私記(一) 西郷信綱 日本文学 (五・三、31・2) 7
- 持統天皇の吉野離宮 尾山篤二郎 国語と国文学 (三・三、31・3) 13
- 万葉集第七、十一、十二、十三巻の編集年代と各巻の特質 土居光知 東京女子大学論集(六・二、31・3) 24
- 平城京居住者の分布 大井重二郎 万葉集大成月報(三、31・3) 1
- 万葉集二五番「天皇御製歌」 戸谷高明 和歌文学研究(和歌文学会)(一、31・3) 4
- 短歌の原型 土橋 寛 国語・国文(三・四、31・4) 15
- 「水を賜へな妹が直手よ」について―井泉伝説考― 乗岡憲正 国学院雑誌(七〇一、31・4) 12
- 万葉私記(三) 西郷信綱 日本文学 (五・四、31・4) 8
- 「語りつき言ひつぎゆかむ」 大浜巖比古 万葉(一九、31・4) 3
- 万葉集における作品群(承前)―短歌の連作風を中心に― 青木生子 国学院雑誌(五七・一、31・4) 13
- 古代和歌の一性格 窪田敏夫 国語と国文学 (三・五、31・5) 9
- 万葉集における作品群(承前)―短歌の連作風を中心に― 青木生子 国学院雑誌(七〇・三、31・5) 18
- 万葉集・懐風藻より経国集へ 小島憲之 解釈と鑑賞(三・六、31・6) 8
- 防人の歌の一考察 土田知雄 国学院雑誌(七〇三、31・6) 14
- 古歌と古語―古代文化研究― 三宅 清 人文科学科紀要(東大教育学部)(六、国文学・漢文学三、31・6) 45
- 短歌鑑賞の方法 江湖山恒明 解釈と鑑賞(二・七、31・7) 6
- 短歌史 佐々木信綱 解釈と鑑賞(二・七、31・7) 9
- 万葉集一・二期―鑑賞短歌史― 田辺幸雄 解釈と鑑賞(三・七、31・7) 11
- 万葉集三・四期―鑑賞短歌史― 藤森朋夫 解釈と鑑賞(三・七、31・7) 12
- 二種の支配者 森本治吉 上代文学(七、31・7) 5
- 万葉集七夕歌について 中西 進 上代文学(七、31・7) 11
- 志賀白水郎 十首の原形・原意の問題 笠井清 万葉(二〇、31・7) 7
- 初期万葉の一考察 青木生子 文芸研究(三、31・7) 9
- 人麿集の書式をめぐる 阿蘇瑞枝 万葉(二〇、31・7) 7
- 万葉集志賀白水郎歌論義―序列・構成と作者をめぐる― 犬養 孝 解釈と鑑賞(三・八、31・8) 4
- 遣新羅使歌の背景 むしやこうじみのる 国語と国文学(三・八、31・8) 9
- 新撰万葉集上巻の漢詩の作者について 木越隆 国語(教育大学)(四・四、31・9) 10
- 万葉集の表現性に関する一考察 木船正雄 国語・国文(五・九、31・9) 15
- 万葉人の生活について 西岡虎之助 国文学(二・三、31・9) 8
- 万葉集の時代と歌風の展開 久松潜一 国文学(二・三、31・9) 6
- 万葉集における抒情歌 木俣 修 国文学(二・三、31・9) 7
- 万葉集における叙景歌 北住敏夫 国文学(二・三、31・9) 7
- 万葉集における露旅歌 谷 馨 国文学(二・三、31・9) 9
- 万葉集における東歌 森本治吉 国文学(二・三、31・9) 5
- 万葉集における挽歌 藤森朋夫 国文学(二・三、31・9) 5
- 万葉集における防人歌 高崎正秀 国文学(二・三、31・9) 8
- 万葉集と天平時代 佐々木信綱 和歌文学研究(二、31・9) 3
- 貴族と賤民―奴婢の問題をめぐる―



- 上田正昭 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 6  
 交通 坂本太郎 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 7  
 財産と相続 牧野 巽 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 7  
 婚姻―母系制の問題― 高群逸枝 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 9  
 東国の政治的位置と防人 直木孝次郎 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 6  
 万葉語の語源―日本語の系統論に關連して― 村山七郎 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 9  
 万葉集の歌とアイヌの歌謡 金田一京助 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 5  
 万葉人の言葉あれこれ 林 大 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 6  
 万葉人の恋愛 北山茂夫 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 5  
 万葉時代の貴族生活の一側面 石母田 正 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 7  
 村々の万葉びと―万葉集と考古学との關連について―益田勝美 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 6  
 万葉時代の米 直良信夫 解釈と鑑賞(三・〇、31・10) 7  
 万葉考二題―「椎の葉」と「遠けども見ゆる面影」― 市村 宏 文学論叢(五、31・10) 11  
 序詞の原流 土橋 寛 万葉(三、31・10) 22  
 類聚歌林の形態 吉永 登 万葉(三、31・10) 4  
 和歌と漢語・仏教語 宮田和一郎 解釈(三、31・11) 2  
 万葉集東歌の序詞 上西 繁 研究・文学篇(神戸大学文学会)(二、31・11) 58  
 淡海歌の根柢 尾崎暢映 国学院雑誌(七、31・12) 9  
 防人歌の採集 相磯貞三 国学院雑誌(七、31・12) 8  
 古代和歌における微光の美感 土田知雄 国学院雑誌(七、31・12) 8  
 望祭歌について 吉田義孝 国学院雑誌(七、31・12) 10  
 万葉集の展開史的研究―その序論― 押見虎三 人文科学研究(新潟大学)(二、31・12) 20  
 万葉私記(五) 西郷信綱 日本文学(日本文学協会)(五、三、31・12) 6  
 万葉集の「きみ」について 能勢頼賢 学苑(二、31・12) 11  
 万葉集における誤伝の一例 佐竹昭広 国語・国文(三、31・1) 11  
 瀬浦之天木香樹 松田芳昭 国語と国文学(三、31・1) 10  
 異伝発生のある場合 神堀 忍 万葉(三、32・1) 3  
 卷十五に對する私見 加藤順三 万葉(三、32・1) 6  
 遣新羅使人等の無記名歌について 藤原芳男 万葉(三、32・1) 9  
 挽歌の誦詠―人麻呂贗宮晚歌の特異性― 伊藤 博 国語・国文(三、32・2) 17  
 初期万葉集の一考察 長谷朋子 国文学会誌(二、32・2) 4  
 民謡としての東歌 小川達雄 文学(三、32・2) 9  
 東歌に現われた東国言語の特色 松田慶治 国語国文学紀要(秋田大学)(三、32・3) 14  
 長歌撰格成立考―特に守部の未紹介腹稿本と書簡を中心として― 徳田 進 高崎論叢(四、32・3) 33  
 万葉美の一考察 杉村瑞子 日本文学研究(高知市)(一、32・3) 6  
 東歌序詞の風土性―武蔵国の歌の場合― 藤森朋夫 日本文学(東京女子大学)(八、32・3) 11  
 万葉のあま 高木市之助 万葉(三、32・4) 12  
 淡海歌の発想 尾崎暢映 和歌文学研究(三、32・4) 9  
 防人歌論 森本治吉 上代文学(八、32・6) 8

白木棉花に落ちたきつ 賀古 明 万葉集研究(三、32・6) 6  
 巫女文学の系譜(一) 柳井己酉朔 万葉集研究(三、32・6) 10  
 万葉の面白さ 土橋 寛 論究日本文学(立命館大学日本文学会)(六、32・6) 5  
 万葉集の太陽族 高橋正秀 NHK短歌(三、32・7) 10  
 七夕歌と柿本人麿集 後藤利雄 万葉(四、32・7) 6  
 枕詞考 坂口 守 国学院雑誌(六、四、32・8) 43  
 松浦河の魚 小島憲之 国語・国文(六、32・8) 5  
 筑前国志賀白水郎歌十首の形成 渡瀬昌忠 文学(五、六、32・8) 11  
 英雄への道―雄略天皇の場合― 高木市之助 文学(五、六、32・8) 8  
 「長夜」考―万葉集の季節感に關連して― 林 勉 和歌文学研究(四、32・8) 9  
 万葉集の霞と霧 村田通男 和歌文学研究(四、32・8) 10  
 「歌かへし」と「かへし歌」 岩橋小弥太 国学院雑誌(六、五、32・9) 5  
 日本語における色名の発生 曾田文雄 国語・国文(六、五、32・9) 9  
 万葉集「東歌」の採集について 井村哲夫

語文(六、32・9) 7  
 風土芸学上の構想―万葉学の一分野として― 八木 毅 語文(六、32・9) 9  
 万葉人の文芸観―題詞左註を中心として― 久松潜一 国学院雑誌(六、六、32・10) 8  
 古代国名の二字表記について―「柿本人麿集」の筆写年代について― 柿本人麿 篠 勲 国語・国文(六、六、32・10) 12  
 万葉滯衣考 市村 宏 文学論叢(六、32・10) 12  
 古代文学における地方と中央―防人歌を中心として― 土橋 寛 国語・国文(六、二、32・11) 21  
 枕詞の発生的基盤 桜井 満 国学院雑誌(六、六、32・12) 11  
 代作の傾向―初期万葉の宮廷歌について― 伊藤 博 国語・国文(六、三、32・12) 14  
 松浦河の魚(二) 小島憲之 国語・国文(六、三、32・12) 2  
 万葉集巻一目録考 岩松空一 日本文学研究(二、32・12) 14  
 万葉人の無常観―道元研究の一助として― 竹内道雄 芸林(六、六、32・12) 13  
 万葉集における虚字の効用 瀬古 確 語文研究(六、七、32・12) 8  
 万葉集における有情とその存在の表現―「ある」と「をる」を中心として― 瀬良益夫

語文・研究(六、七、32・12) 9  
 万葉集の作品形態 浜田清次 日本文学研究(二、32・12) 26  
 家持池主の書(万葉)と劉琨・盧諶の書(文選) 古沢未知男 文学・語学(六、32・12) 13  
 万葉恋風考 市村 宏 文学論叢(六、32・12) 10  
 万葉長歌の時象 賀古 明 和洋女子大学紀要(二、32・12) 12  
 饗宴における歌の座―万葉歌の作歌基盤― 杉山康彦 国語と国文学(三、一、33・1) 8  
 万葉歌風の系譜 藤森朋夫 国文学(三、一、33・1) 5  
 万葉集短歌の韻律 柴生田 稔 国文学(三、一、33・1) 5  
 万葉集の枕詞と序詞 境田四郎 国文学(三、一、33・1) 5  
 万葉集を作り出す者 高木市之助 国文学(三、一、33・1) 5  
 万葉集に現われた神の概念 武田祐吉 国文学(三、一、33・1) 5  
 万葉集の思想性 久松潜一 国文学(三、一、33・1) 4  
 万葉集における「性」 森本治吉 国文学(三、一、33・1) 6  
 準不足音句考 木下正俊 万葉(六、33・1)

- 12 反歌放序説 吉井 巖 万葉(二六、33・1) 14  
 万葉集の修辭―特に反復句、類句、慣用句等  
 について― 瀨古 確 熊本大学教育紀  
 要(六、33・3) 15
- 東歌所出の人麿歌集の歌をめぐる  
 福田良輔 文学・語学(七、33・3) 12
- 万葉集乞食者歌考―主としてその背景から―  
 酒井貞三 文学・語学(七、33・3) 11
- 古文芸に現われた美意識―形容詞を中心に―  
 菅野洋一 文芸研究(二六、33・3) 9
- 老人のうた 土橋 寛 国語と国文学(三三・四、  
 33・4) 11
- 万葉の精神 北山茂夫 文学(二六・四、33・4)  
 13
- 奈良遷都途中の歌について 吉永 登 万葉  
 国見歌の展開 桜井 満 万葉集研究(三、  
 33・5) 9
- 露霜私考―万葉の露霜― 桑川定一 国語・  
 国文(三三・六、33・6) 16
- 国文学研究における鑑賞批評の問題―古代詩  
 歌を中心として― 斎藤清衛 文学・語学  
 (八、33・6) 7
- 東歌 防人歌の色彩 伊藤 昭 上代文学  
 (武田祐吉博士追悼号)(三〇・33・7) 13
- 鎮懐石伝説の検討 中西 進 国語と国文学  
 (二五・七、33・7) 13
- 歌の転用―万葉歌の一解釈― 伊藤 博 万  
 葉(二六、33・7) 11
- 引用―上代語の場合― 川端善明 万葉(二六、  
 33・7) 30
- 枕詞と神名と 桜井 満 国学院雑誌(五九・  
 九、33・9) 12
- 万葉における生活歌 土岐善麿 国文学(二  
 三、33・9) 6
- 国見歌の万葉における展開―行幸従駕と驛旅  
 の作をめぐる― 土橋 寛 国語・国文  
 (二七・二、33・12) 14
- 懷風藻より天平万葉の詩序へ 小島憲之  
 国語・国文(二七・二、33・10) 14
- 編者の意図―万葉集卷一の場合― 伊藤 博  
 国語・国文(二七・二、33・10) 12
- 万葉集と懷風藻 緒方惟精 国文学叢(三三、  
 33・5) 9
- 新撰字鏡と遊仙窟 藏中 進 万葉(二六、33・  
 10) 9
- 遊仙窟の影 小島憲之 万葉(二六、33・10)  
 2
- 相聞歌異見 沢潟久孝 万葉(二六、33・10) 7
- 奈加弭考 鈴木敬三 国学院雑誌(五九・二、  
 二合併号、33・11) 4
- 玉靖考 柳井己酉朔 国学院雑誌(五九・二、  
 二合併号、33・11) 6
- 万葉集における詠物詩の影響―家持の作品を  
 中心として― 土田知雄 国学院雑誌(五九・  
 二、二合併号、33・11) 6
- 万葉集卷二は勅選ではない―挽歌に観る悲劇  
 的性格― 筏 勲 解釈(四・二、三合併号、  
 33・12) 3
- 万葉集の口誦歌について―万葉の新しい理解  
 のための覚書― 久米常民 紀要(愛知県  
 立女子大学)(九、語学・文学、33・12) 20
- 鎮懐石原形論 中西 進 国語と国文学(三三・  
 三、33・12) 13
- 初期万葉―その抒情性について― 野上久人  
 研究紀要(尾道短期大学)(八、33・12) 20
- 万葉集巫祝歌の考察―標結・結松・結草につ  
 いて― 鶴殿正元 人文科学論集(六、33・  
 12) 21
- 万葉の旅 蜂矢宣郎 まほろば(奈良県高等  
 学校国語文化会)(三、33・12) 4
- 大陸文化と万葉集 山岸徳平 国文学(四・二、  
 34・1) 6
- 万葉集の相聞歌 青木生子 国文学(四・一、  
 34・1) 8
- 万葉集の滑稽歌 釜田喜三郎 国文学(四・一、  
 34・1) 9
- 万葉集における笑い―新版・滑稽万葉ものが  
 たり― 森本治吉 国文学(五・一、34・1) 5
- 万葉集の美の探求 岡崎義恵 国文学(四・一、

- 34・1) 6  
 万葉集と古今集 窪田章一郎 国文学(四・一、34・1) 6  
 万葉集と新古今集 山崎敏夫 国文学(四・一、34・1) 6  
 万葉集と記紀歌謡 相磯貞三 国文学(四・一、34・1) 5  
 万葉集の思想性 森本治吉 国文学(四・一、34・1) 8  
 万葉集の伝説歌と民俗の歌 西角井正慶 国文学(四・一、34・1) 6  
 万葉集の表現技巧 柴生田 稔 国文学(四・一、34・1) 4  
 万葉集の風土的性格 犬養 孝 国文学(四・一、34・1) 7  
 古代前期 渡瀬昌忠 日本文学(未来社)(一・一、34・1) 6  
 万葉注釈巻第二を読んで 森本治吉 万葉(四〇、34・1) 10  
 万葉集の酒宴歌とその詠詠 久米常民 説林(三、34・2) 19  
 令反或情歌と反招隠詩と 藤野岩友 国学院雑誌(三三、34・3) 11  
 天平万葉の流れ 小島憲之 国語・国文(二六、34・3) 12  
 万葉恋霧考 市村 宏 文学論藻(二三、34・3) 7
- 連歌源流の考―佐保河之水平壑上而の歌を中心に― 島津忠夫 万葉(三三、34・4) 8  
 反歌としての短歌の成立過程 森重 敏 万葉(三三、34・4) 41  
 万葉集の時代区分 扇畑忠雄 万葉(三三、34・4) 10  
 本文整理二本文のきめ方―万葉集研究― 大野 晋 解釈と鑑賞(四六、34・5) 11  
 呪禱の文学 乗岡憲正 国学院雑誌(三六、34・5) 9  
 淡等謹状(万葉)と琴賦(文選) 古沢未知男 国語と国文学(三六、34・5) 11  
 カルデアの知識 中西 進 文学・語学(三三、34・6) 13  
 万葉集景物論の構想 大久保 正 国語国文研究(三三、34・7) 13  
 万葉の夢「とほのみかど」 春日和男 国語研究(三三、34・7) 3  
 万葉集巻十四成立攷 水島義治 国語国文研究(三三、34・7) 29  
 昭和俳句と万葉集 松井利彦 論究日本文学(二一、34・9) 10  
 文学精神の流れ―上代― 川崎康之 解釈と鑑賞(四二、34・10) 8  
 万葉集巻八編集の意図とその時について 吉永 登 国文学(関西大学)(二六、35・1) 6  
 万葉集における題詞・左註の意味するもの
- 久米常民 説林(三三、35・1) 14  
 万葉集の呪術歌の一考察―唾液魂と氣息魂の信仰― 鶴殿正元 日本文学研究明治大学人文科学研究所紀要(四、35・1) 12  
 訛伝の定着 木下正俊 万葉(四二、35・1) 11  
 出典問題をめぐる貧窮問答歌 小島憲之 万葉(四二、35・1) 5  
 万葉解釈におけるアキレスの踵 土橋 寛 万葉(四二、35・1) 17  
 本文批評の根柢 沢潟久孝 万葉(三三、35・1) 4  
 万葉の夢 森脇一夫 街路樹(六二、35・2) 3  
 挽歌と相聞の境界 阪口 保 国語教育(四、35・2) 5  
 長歌と反歌との関係 鈴木千尋 学芸(五、35・3) 13  
 万葉秀歌への疑問 角嶋東 学士会月報(六七、35・3) 4  
 宫廷歌謡の一型式 伊藤 博 国語・国文(二九、35・3) 14  
 万葉集の分類をめぐって 小島憲之 島田教授古稀国文学論集(関西大学)(35・3) 17  
 懐風藻と万葉集との関連について 緒方惟精 文化科学紀要(千葉大学文理学部)(二、35・3) 35

万葉遊行女婦考 市村 宏 文学論藻(六・35・3) 12  
 万葉集に現れたる宗教意識の構造 平野仁啓  
 文芸研究(明治大学 文芸研究会)(七・35・3) 43  
 万葉における古歌の誦詠 内田暁郎 和歌文学研究(六・35・3) 5  
 万葉集に現われた文芸思潮 田辺幸雄 国文学(五・五・35・4) 6  
 反歌としての短歌の成立過程―文体論的考察― 森重 敏 万葉(三・35・4) 41  
 上代文学への道 小島憲之 解釈と鑑賞(五・六・35・5) 5  
 万葉長歌における枕詞の位相と機能 松田芳昭 国文学叢(三・35・5) 8  
 東歌―その抒情性― 野上久人 国文学叢(三・35・5) 9  
 万葉末期の伝誦歌 内田暁郎 国文学叢(三・35・5) 6  
 まつしたす考―東歌における愛と呪術― 稲田浩二 国文学叢(三・35・5) 5  
 枕詞に関する一考察―記紀歌謡・万葉集に用いられた枕詞の機能を中心として― 森井蘭 女子大國文(一七・35・5) 8  
 万葉集長歌の字余り字足らずの研究 片桐隆 山形大学国語研究(三・35・5) 12  
 万葉集防人歌の場の構成―官公的性格を否定

する― 角川洋一 山形大学国語研究(三・35・5) 16  
 反歌試論(二) 渡部和雄 国語国文研究(六・35・6) 15  
 短歌と古代 高木市之助 解釈と鑑賞(二・三・八・35・7) 6  
 大宝・養老戸籍所載の人名語と万葉集 筏敷 国文学(五・八・35・7) 5  
 日本語・音韻の歴史―上代― 馬淵和夫 解釈と鑑賞(三・三・35・9) 9  
 作品と当時の発音―万葉集― 木下正俊 解釈と鑑賞(三・三・35・9) 9  
 万葉の人間―序にかえて― 稲垣富夫 美夫久志(二・35・9) 7  
 沈む女―その伝承の背景― 吉井 巖 万葉(三・三・35・10) 21  
 万葉作者不明の恋歌(一) 今泉 進 街路樹 万葉集における「見ゆ」の対象 建部一男 論究日本文学(三・35・11) 6  
 記紀歌謡と万葉集 田辺幸雄 解釈と鑑賞(二・三・35・12) 8  
 万葉景物の一考察―月と月夜と― 戸谷高明 学術研究(早稲田教育学部)(六・35・12) 12  
 古今集読入しらず歌と万葉集 服部喜美子 文学・語学(六・35・12) 15  
 万葉集東国語音韻攷―防人の歌を中心に―

津之地直一 愛知大学文学論叢(三・36・1) 24  
 万葉集作者不明の恋歌の性格(二) 今泉 進 街路樹(七・36・1) 4  
 万葉の「真野の草原」 扇畑忠雄 群山(六・一・36・1) 4  
 万葉集における歌風の変遷 柴生田 稔 解釈と鑑賞(六・三・36・2) 7  
 長歌の形式 大久保 正 解釈と鑑賞(六・三・36・2) 6  
 防人歌 吉永 登 解釈と鑑賞(六・三・36・2) 7  
 東歌 田辺幸雄 解釈と鑑賞(六・三・36・2) 19  
 万葉集年表 中西 進 解釈と鑑賞(六・三・36・2) 2  
 本文校訂の問題と技術―特集万葉集ハンドブックから― 大野 晋 解釈と鑑賞(六・三・36・2) 14  
 万葉集の諸本 林 勉 解釈と鑑賞(六・三・36・2) 8  
 万葉集に投影した海外文学 中西 進 国文学(六・三・36・2) 6  
 万葉集における中国詠物詩の影響―巻十を中心として― 土田知雄 北海道学芸大学紀要(二・36・2) 7  
 万葉語例言―情意語の性格について―

- 賀古明 武蔵野文学(六、36・2) 7  
 万葉集研究の動向と実態 藤森朋夫 武蔵野文学(八、36・2) 7  
 万葉集論のためのひとつの石―撰歌基準と雑歌の一特色をめぐって― 近藤潤一 国語国文研究(六・二六、36・3) 9  
 万葉集における伝誦と編集 渡辺和雄 国語国文研究(六・二六、36・3) 8  
 白鳳万葉ということ 徳光久也 美夫君志(三、36・3) 2  
 相聞歌の表現 瀬古 確 美夫君志(三、36・3) 11  
 万葉の人間―王権の主張― 稲垣富夫 美夫君志(三、36・3) 9  
 万葉集題詞の二類型について―仮説設定へのプロセス― 久米常民 美夫君志(三、36・3) 12  
 万葉集に現れたる神仙思想 野口 進 美夫君志(三、36・3) 5  
 万葉集から古今集へ―序歌に見られる修辭の流れの一端― 服部喜美子 美夫君志(三、36・3) 5  
 万葉集における雑歌の表現 瀬古 確 語文研究(二二、36・4) 12  
 万葉作者不明の恋歌の性格(三) 今泉 進 街路樹(七五、36・5) 3  
 詠物歌の位置 中西 進 上代文学(二、36・5) 9  
 万葉集における季節感(一) 久保田智哉 上代文学研究会会報(六、36・6) 6  
 万葉集文学への一つのアプローチについて―風土文芸学的操作を語る― 高木市之助 文学・語学(三、36・6) 7  
 万葉集巻十五試論 古屋 彰 国語と国文学(二六・七、36・7) 10  
 万葉集の挽歌について 平泉 洸 芸林(三、36・8) 6  
 「歌式」以前―天平歌人の文学論― 小島憲之 国語・国文(三三・八、36・8) 5  
 万葉集「筑前国志賀の白水郎の歌十首」考 池田 毅 歌と評論(三三・九、36・9) 3  
 万葉集「筑前国志賀の白水郎の歌十首」考(二) 池田 毅 歌と評論(三三・一〇、36・一〇) 3  
 儀礼歌 倉林正次 国学院雑誌(三三・一〇、36・一〇) 6  
 彌の力 長瀬 治 国学院雑誌(三三・一〇、36・一〇) 8  
 万葉集長歌形態の変遷 片桐隆 国語研究(三三、36・一〇) 12  
 長恨歌の絵について 近藤春雄 説林(八、36・一〇) 10  
 詩経と万葉集との間 蒲池敏一 日本文学論究(二〇、36・一〇) 5  
 万葉集の旋頭歌 本位田重美 ハハキギ(二〇、36・一〇) 5  
 東歌編纂論から展開される諸問題とその考察 北条忠雄 文芸研究(三九、36・一〇) 12  
 万葉歌人の伝承精神 岡田松之助 文芸研究(三九、36・一〇) 7  
 万葉語再言 賀古 明 万葉集研究(六、36・一〇) 9  
 仮説からの出発―万葉集題詞の問題― 久米常民 美夫君志(四、36・一〇) 2  
 万葉の人間―望国― 稲垣富夫 美夫君志(四、36・一〇) 8  
 万葉巻一・巻二勅撰説に対する一疑問 後藤利雄 美夫君志(四、36・一〇) 5  
 万葉集「筑前国志賀の白水郎の歌十首」考(三) 池田 毅 歌と評論(三三・二、36・一一) 3  
 万葉集における象徴 北住敏夫 国文学(三三、36・一一) 5  
 東歌と季節感 田原悦子 上代文学研究会会報(四〇、36・一一) 3  
 万葉集における季節感(二) 久保田智哉 上代文学研究会会報(四〇、36・一一) 7  
 万葉集「筑前国志賀の白水郎の歌十首」考(四) 池田 毅 歌と評論(三三・二、36・一二) 3  
 初期万葉の構図 渡部和雄 国語国文研究

(10) 36・12) 23

連歌と万葉集との関係―万葉の発想についての調査― 岡本彦一 論究日本文学(一六

36・12) 8

辞賦の系譜 中西 進 ぐんしよ(二、37・1)

26

万葉の歌語り 伊藤 博 言語と文芸(四・一、37・1) 11

37・1) 11

万葉集巻五追補の一時期について―家持の類句・類想・用字の面から― 稲岡耕二

国語と国文学(元二、37・1) 14

沈む女(二)―佐用比売伝説をめぐる―

吉井 巖 万葉(四、37・1) 13

辞賦の系譜(下) 中西 進 ぐんしよ(三、37・2) 19

万葉集序詞索引―序詞のイメージのために(一)― 菅野 宏・菅野顕光 福島大学学芸学部論集(三三、37・3) 19

時雨ふり濡れ通るとも 尾崎暢映 言語と文芸(四・三、37・5) 10

あづま歌に見える農業社会 今井福治郎 国文学(七六、37・5) 5

日本の地方官制に及ぼした中国の影響―特集万葉集の郷土(万葉郷土作品概論)―

森 克己 国文学(七五、37・5) 4

万葉の都会歌と地方歌の文学差 久松潜一 国文学(七五、37・5) 4

万葉集巻第十三の編纂における一問題

中川幸広 語文(三三、37・6) 10

野遊び小考 高里盛国 上代文学研究会会報(二一、37・6) 3

「万葉集」と「懷風藻」―上代文学における中国文学の影響― 木村 敏 上代文学研究会会報(二、37・6) 4

「心の緒ろ」をめぐる 瀬古 確 不知火(二四、37・7) 7

万葉短歌の構造(その一) 安良岡康作 国文学(七〇、37・8) 3

長歌論 中西 進 美夫君志(五、37・7) 10

万葉と非万葉 高木市之助 美夫君志(五、37・7) 10

万葉「無心所著」歌論とその歌 久米常民 美夫君志(五、37・7) 12

万葉集長歌試論 小林正治 国語(栃木県高等学校国語科研究会(二一、37・9) 6

「玉梓の使」考―使者の古代文学史的意義― 久米常民 説林(九、37・9) 11

世界に類のない古代歌集 長谷川如是閑 万葉集注釈巻第十一附録(37・9) 2

万葉人の戯歌―中国文学との関連において― 小島憲之 漢文学研究(二〇、37・10) 13

万葉短歌の構造(その二) 安良岡康作 国文学(七三、37・10) 3

万葉集巻五の筆録者について 橋本達雄

国文学研究(二六、37・10) 14

万葉短歌の構造(その三) 安良岡康作 国文学(七二四、37・11) 4

万葉情意語の生成―「忘れ貝」・「恋忘れ貝」― 賀古 明 上代文学(三三、37・11) 11

防人歌の性格 高里盛国 上代文学研究会会報(三三、37・11) 4

万葉集と懷風藻(二)―上代文学における中国文学の影響― 木村 敏 上代文学研究会会報(三三、37・11) 5

万葉の浪漫的精神―真間の手児奈と菟原娘子と― 松原 博 宝島(二、37・11) 19

万葉集の研究―類歌とその周辺―五十嵐和江 FORUM(二、37・11) 6

万葉の景物―霞― 戸谷高明 早稲田大学教育学部学術研究(二一、37・11) 12

万葉短歌の構造(その四) 安良岡康作 国文学(七二五、37・12) 5

祭の中の万葉集―コモルを中心として― 今井福治郎 房総文化(五、37・12) 10

酒环に散々浮く花 尾崎暢映 万葉集研究(七、37・12) 10

家持園の特殊歌風(一) 賀古 明 万葉集研究(七、37・12) 16

二つの「賀」から 木下正俊 万葉(四六、38・1) 7

卷十七の対立異文の持つ意味 木下正俊

万葉(冥、38・1) 10

万葉の郎女 藤原芳男 万葉(冥、38・1) 7

万葉の解釈 飯倉篤義 万葉(冥、38・1) 12

西南辺境よりみた律令国家—万葉集の「肥人」

をめぐって— 志方正和 芸林(四、一、38・2) 18

舒明朝以前の万葉歌の性格—その配列の由来

をめぐって— 伊藤 博 国語・国文(三、三、38・2) 18

家持の「立ちくく」「飛びくく」の周辺(上)

—万葉集における自然の精細描写試論—

稲岡耕二 国語と国文学(四〇、一、38・2) 11

伝説歌の成立条件—虫麻呂の伝説歌を中心に

— 清水克彦 女子大国文(二六、38・2) 13

万葉の「彼」 橋本四郎 女子大国文(二六、38・2) 13

家持の「立ちくく」「飛びくく」の周辺(下)

—万葉集における自然の精細描写試論—

稲岡耕二 国語と国文学(四〇、三、38・3) 12

万葉卷十四の成立について 菊池威雄 国文学研究(三三、38・3) 9

東歌—その労働歌としての表現様式—

黒沼正子 国文目白(三、38・3) 11

歌語りと伝説歌をめぐって—五十嵐和江

成城万葉(一、38・3) 6

万葉集序詞表現の研究—形式論を中心として

— 森本治吉 中央大学文学部紀要(三、38・3) 33

序歌の象徴性—万葉集における序歌の象徴性

について— 西尾嘉之 日本文芸研究(五、一、38・3) 13

万葉短歌の構造(その六) 安良岡康作 国文学(八、四、38・4) 5

万葉集の海洋性 井上 豊 人文社会(三三、38・4) 25

古代叙事詩の彷徨 森 秀人 短歌(二〇、四、38・4) 8

古代文学の形成—万葉の自然— 窪田章一郎

短歌(二〇、四、38・4) 6

抒情の形成 笠原伸夫 短歌(二〇、四、38・4) 8

生活者の情熱とエネルギー—「東歌」の歌の

周辺— 山田あき 短歌(二〇、四、38・4) 8

万葉短歌の構造(その七) 安良岡康作 国文学(八、五、38・5) 6

万葉の相聞と挽歌 前登志夫 短歌(二〇、五、38・5) 3

万葉短歌の構造(その八・完) 安良岡康作

国文学(八、六、38・6) 3

ねむの花—万葉集の戯歌をめぐって—

小島憲之 人文研究(二四、四、38・6) 6

万葉集の筆録と万葉集の編纂 神田秀夫

言語と文芸(五、七、38・7) 15

万葉集の「死」の歌 湯之上早苗 中世文芸

(三、七、38・7) 6

常処女 尾崎暢映 古代文学(三、38・9) 8

万葉集卷第十四の蒐集者 江野沢淑子

古代文学(三、38・9) 9

万葉手次考 市村 宏 上代文学研究会報

(三、38・9) 4

近江朝における宮廷文化の発現—初期万葉論

その一— 北山茂夫 立命館文学(三六、38・9) 20

万葉集における記号としての「云」と或云

藤原芳男 万葉(冥、38・10) 13

万葉時代時期区分論 岡部政裕 人文論集

(静大文理学部)(四、38・11) 19

風の音(万葉の系譜) 小島正敏 神戸短期

大学論叢(八、二、38・12) 11

万葉集長歌における題詞と枕詞—枕詞の抽出

的機能について— 松田芳昭 国語教育研

究(八、38・12) 11

初期万葉の世界 吉永 登 解釈と鑑賞(三、一、39・1) 8

東国的世界と東歌・防人歌 森本治吉 解釈

と鑑賞(元、一、39・1) 6

古典作家の伝記研究とその方法 山岸徳平

国文学(九、一、39・1) 6

万葉集と類聚歌林 伊丹未雄 国文学(九、一、39・1) 5

万葉集における防人歌 高崎正秀 国文学

(三、一、39・1) 5

— 16 —



(二三、39・1) 8

万葉女流歌人―その愛の一面― 青木生子

国文学(九一、39・1) 7

題詞の権威―旅の歌の一解釈― 伊藤 博

万葉(五、39・1) 15

上代における美の認識 森田康之助 芸林

(五一、39・2) 18

伝説歌の源流 伊藤 博 国語・国文(三三、

三、39・3) 15

万葉人の世界観―デーモンと夢について―

森本治吉 国文学(九四、39・3) 10

旋頭歌と難訓歌 神田秀夫 国語と国文学

(四一、39・5) 9

万葉集 犬養 孝 国文学(九八、39・6) 6

譬喩歌と寄物陳思歌―衣服の色彩をとおして

みた―伊原 昭 上代文学(六、39・6) 9

万葉集卷十四と挽歌 桜井 満 上代文学

(六、39・6) 7

「かけ」の話 土橋 寛 美夫君志(七、39・6)

9

原万葉―卷一の追補― 中西 進 美夫君志

(七、39・6) 19

万葉解放の二面 松田好夫 美夫君志(七、

39・6) 8

万葉集と現代人 高木市之助 美夫君志(七、

39・6) 10

万葉集はよめるか 亀井孝 美夫君志(七、

39・6) 8

恋情発想と昔―民謡化の一典型― 桜井 満

美夫君志(七、39・6) 8

万葉集卷第一、二の含む機制 太田善磨

国語と国文学(四九、39・9) 12

上代伝承試論―聖徳太子片岡説話をめぐって

―高 壮至 万葉(五、39・10) 21

国見歌の伝承と展開 高崎正秀 国学院雑誌

(六五、二、合併号、39・11) 19

天武殞宮の文学史的意義―諫と挽歌の関係を

中心に―吉田義孝 国語と国文学(四二、

39・11) 9

万葉集卷十四の追補 桜井 満 文学・語学

(四四、39・12) 11

万葉集における歌詞の異伝 曾倉 岑 国語

と国文学(元九、36・9)

万葉集「筑前国志賀の白水郎の歌十首」考

(一) 池田 毅 歌と評論(三二、36・10)

3

万葉歌人の伝承精神 岡田松之助 文芸研究

(三九、36・10) 7

仮説からの出発―万葉集題詞の問題―

久米常民 美夫君志(四、36・10) 12

## 二 語法・訓詁

万葉集の訓義 藤井信男 文学(二三、20・

10) 3

「よき人」の語義―特に能仁・能人の義につい

て―白石大二 国語と国文学(三二、21・

2) 6

「雲根火雄男志等」について 中島光風 文学

(四四、21・5) 3

万葉集戲書の出典 水野駒雄 国語と国文学

(三三、21・7) 2

尙る船木 佐伯梅友 国語・国文(五、六、七

合併号、21・9) 11

「歌」小稿―現象学止揚の前提として

北山正通 国語・国文(五八、21・9) 20

上代国語における「靡」の「靡状」「れ」の研究

森 重敏 国語・国文(五八、21・9) 21

莫囂円隣之訓 塩谷 賛 文学(四二、

21・11) 3

母にさはらば 佐伯梅友 短歌研究(四一、

22・1、2) 4

「うせみ」の語義について 大野 晋 文学

(五二、22・2) 8

上代係助辞論 森 重敏 国語・国文(一六、